



# ごあいさつ

## 「文化の森20周年」

「文化の森へ行こか。」美濃加茂市を訪れる友に自慢できる施設。

「すごいね。」エントランスに入って驚く友の声を聞けるのが誇らしい。

「子供たちの声が元気だね。」体験できる施設の歓声がうれしい。

文化の森も20歳。

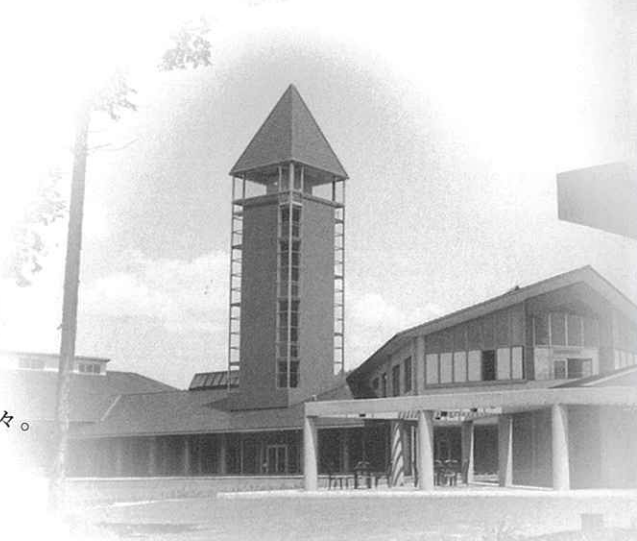
「ここで見たサイや展望台の景色を一生忘れない」成人式での新成人。

「もう20年も経つ」体験学習を手弁当で主催されるボランティアの方々。

多くの方の知恵と汗で実現した「市民の誇り」。

最先端技術の時代にこそ必ず残り続ける「市民の財産」

これからも皆さんと一緒に、目指すべき道を守り続けます。



### 「なぜだろう・なぜかしら」

私の人生を決めたと言っていい一冊の本があります。

父親が唯一買ってくれた本で、「なぜだろう・なぜかしら」という小学生用の科学の本です。

「星はなぜ光っているの?」、「なぜ雲は空に浮かんでいるの?」。

疑問に持ったことさえなかった質問に強烈なショックを受けたことを覚えています。

その後、同様な本に興味を持ち、最終的には「百科事典」を読むことが楽しい(ちょっとアブナイ)小学生でした。

何かを不思議に思う。これは人間にとって重要な感覚であり、人間だけに与えられた能力のような気がします。

自分の生活している環境に疑問が生まれると、それを理解しようとする努力が生まれ、

それが理解できた時には、大きな喜びと深い感謝を感じることができます。

さらには、それを改革、前進させようとする意欲も生まれてきます。

人間として生きるためには、「なぜだろう」が絶対に必要だと思います。

「なぜだろう」はその時々で偶然に得ることはできます。

しかし、未来を創る子供たちの偶然を待つことなく、

「なぜだろう」を提供する環境やタイミングが大切だと思います。

それを、「文化」を通して提供できる場所が「文化の森」です。

これまでの20年間、文化の森は、自然、歴史、郷土など様々な「なぜだろう」を提供してきました。

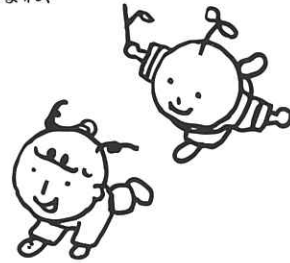
ちょっとした「なぜだろう」が子供たちの人生に多様性を与え、また子供たちの「なぜだろう」を

通じて私たちも「さらになぜだろう」という新たな意欲を得ることができました。

これからの20年も、さらに「なぜだろう」に磨きをかけ、

新時代にふさわしい「なぜだろう」を提供していきます。

美濃加茂市長 伊藤誠一



## 目次

20歳を迎える文化の森へ—おめでとう！ひとことメッセージ	2
20周年記念対談「ここに至るまでを振り返る」川合良樹氏×渡辺俊幸氏	12
年表でたどる文化の森「これまでのあゆみ」	15
子どもたちと文化の森—その先を目指して	24
「そして、これから」	28
統計資料	29



みのかも文化の森 20周年にあたり、メッセージを募集致しましたので、掲載させていただきます。

文化の森での思い出やエピソード、そしてこれからへの期待など...様々な素敵なメッセージが集まりました。お寄せくださった皆様ありがとうございました。

このメッセージはミュージアムニュース等での募集記事を見てお寄せくださった方、平素文化の森の博物館活動に参画し大切に思ってくださいている方、その分野の研究で文化の森を紹介して下さった方、何度も文化の森に足を運んでくださった博物館関係の方などに寄せていただきました。

(おおよそ五十音順、敬称略)



安達孝子  
生活体験ボランティア

ちょうど子育ても一段落した頃、文化の森がオープンし、ボランティアに参加することになりました。程よい山の中でのボランティア活動は、私の心を動かし、気付けば早二十年の月日が過ぎようとしております。

人と人と人との出会い、お名前も何も知らないお付き合いの中で、色々学ぶ事も多くありました。今では生活の一部となり朝に夕に森の木立ちが頭の中をよぎります。



安藤志郎  
文化財保護審議会委員  
学習支援ボランティア  
美濃加茂自然史研究会  
元 学習係

文化の森(博物館)の基本を貫いてきた20年間に感謝  
文化の森が立ち上がる10月を前に市民ミュージアムの展示を作るため、学芸係と徹夜に近い作業をした思い出がよみがえってくる。もう20年が過ぎたのだ。当時の思いを語る職員は可見博物館長を含め数人になってしまった。しかし、文化の森のコンセプトは揺るぎなく受け継がれている。

コロナ禍、一番先に予算が切られるのは文化なのかもしれない。でも、私は心配していない。館長を始め学芸員等の直向きな努力で、みのかも文化の森の活動や市民ミュージアムは全国的にも認められている。これからも地域に根付いた活動が展開されることを期待している。



伊佐治 優  
文化の森の講座に色々参加 中学生

文化の森での思い出

僕は、小学校1年生の時に、第1回文化の森賞を受賞しました。副賞として、化石を使った実験と、森の探索をさせていただきました。この時クワノマを捕まえたことは忘れません。また、フォレストくらぶには、2年連続入会して、まゆの家で飯盒すいさんや、竹馬で遊んだりしました。山之上小学校でも、何度も文森学習で、利用しました。

このように、思い返してみると、学校では、学習できない楽しい経験をたくさんすることができました。僕は家族と一緒によく美術館や科学館に行きますが、文化の森は、体験や学習できる施設なので大好きです。これからも楽しい学習を提案してってください。僕も参加できることを楽しみにしています。



石井 範子  
生活体験ボランティア

私は機織りが学びたくて、開設時にボランティア登録をしました。活動を通じて、美濃加茂の養蚕の歴史やお蚕さんを実際に育ててきもの文化の原点を知れたことは、着付けという技術だけを知り、教えていた私に奥深い知識をプラスしてくれました。

また、文化の森開設時の美術展で、オープン記念賞を頂いたのも大きな思い出です。草木染も交えながら、2006年まで欠かさず出展してこれたのは、周りの方々の大きな力があつたからだと思います。

もうひとつ大きなことはお月見コンサートで笛の音を聴いたことです。初めて聴いた龍笛(りゅうてき)の音に、全身が総毛立ったことを覚えています。現在ある神社で結婚式の雅楽を演奏したり、舞を奉納したりしています。あの時笛を聴いたから「今」があります。

これからもジャンルにとらわれず、様々な企画をして発信して行って欲しい、そんな期待を持っています。



糸魚川 淳二  
半原版画館 館長

20周年、時のたつのは速いものですね。開館準備の時代からお手伝いをしてきたのですが、出来上がった形を見て、うまく行ったなあと思えました。それ以上にその後の活動は多種多様でした。市民の皆さん、学校との連携は抜群でした。「包括的な博物館」という考えを提示したことがあります。一言でいえば「いろいろなことを総合的に行う」ということですが、その典型です。これからも、今までの活動をされるよう期待しています。



井戸 幸一  
元 学芸員

文化の森、20周年おめでとうございます！開館準備の頃、資料の収集や整理・移動、ボランティアの立ち上げなどに追われ、20年後はちょっと想像できませんでした。ただはつきり覚えているのは、初めて内部に入った時、そこに行き交うお客様やスタッフの声やざわめきが聞こえたような瞬間があったことです。大きな期待と希望があったから、もしかしたら未来とつながったのかもかもしれません。

ミュージアムは誕生して、時代とともに成長する、そんな存在であってほしいと願っています。



井戸 湧喜  
文化の森の講座に  
色々参加  
中学生

文化の森開館20周年、おめでとうございます。幼い頃に文化の森で過ごした時間はとても楽しかったです。

森の中で探し回った土器、蚊に刺されながらも捕まえ続けたクワガタやカブトムシ、オナモミをたくさん集めた標本作り、その他書ききれないくらいたくさん楽しい経験をいただきました。これからもたくさんの人を楽しませ続けてください。



牛丸了氏  
展示ガイド  
ボランティア

えっ、もう20年経ちますか。当時、文化の森がオープンと聞き、私も何か参加と思い、展示ガイドB・Tに参加させて頂きました。始めは、先輩達と、ガイド文まで作り来館者の対応をもしました。仲間も高齢化等で脱退、徐々に活動も浅く長くなってきましたが、奈良の石舞台古墳等、研修が良き思い出となりました。

貴設は、近郊の生徒の教育の場として、重要です。又、常設室には古代から現代までの歴史が詰まっています。ぜひ興味のある方、B・Tガイドにトライあれ。



井戸 英彦  
学習支援ボランティア  
元 学習係  
元 教育センター長

子どもたちを育む文化の森

「この虫、この葉っぱをこんなにうまく食べているよ」

「この虫何と言うの？図鑑で調べようっと」

子どもたちの眼はきらきら輝いている。

文化の森開設時に、文化会館等から物を運ぶことや、最初の学習プログラムの作成に関らせていただいた。その時大切にされたことは、文化の森における中心的な指導者は担任の先生、学習係は、「場所と物と人」を結び付けて子どもたちが学び合える最高の条件づくりをすることであると。そのために、学校の担当者と念入りの打ち合わせを行った。先日もボランティアとして訪問したら、学習計画が子どもを育むのにより良いようにと、改訂され、学校、職員、地域のボランティアの努力を強く感じた。

子どもたちが文森で体験したことや活動を家に帰って話し、今度は子どもが家族を文化の森を案内してくれるようになればと、文化の森からのレター作戦も大事にした。そして、この子が親さんになったとき、この文森へ気軽に遊びに来てほしいと。この二十一年でその子たちが親さんになっている。若い親子連れを見ると、かつてこの森で学んだ親さんであろうと嬉しく想像する。

また、美濃加茂市から転勤された先生方が「昔の暮らし」の学習などに、多数訪れておられるとも。ここでの体験が子どもたちにいい学習として成立していたことによるのだろう。快く受け入れてくださる当市に感謝である。

今の世の中には多くの情報が飛び交っている。実際の物に触ったり、においを嗅いだりなど五感を通した活動が少なくなっている。子どもたちが本物に出会い、本物に感動することはいつまでも心に残り、その子の人生にいろいろな影響を与えることだろう。

学校と文森(自然・もの・人)をつなぐ活動は益々大切になってくると思う。



木嶋 紗智恵  
伝承料理の会

竈(かまど)で御飯が炊き出来上がって蓋を取った時の匂いとピカピカと光り立っている御飯を見て「ウワー」と感動していただいた時は、本当に嬉しいものです。

活動のたび、遠くから何度も参加され、会食はまゆの家にて、昔、家でやっていた冠婚葬祭のような形で一緒に食事をいただき、「この漬物の作り方を教えて下さい」との質問にも、会員がお答えし、とてもなごやかな雰囲気の中で味わっています。

これからも、この地に伝わる伝承料理を研究し、豊かな食生活や健康づくりのお役に立てればと思っています



大木 由以  
青山学院大学

開館20周年、誠にありがとうございます。学校教育との連携を進めることを理念の一つとして開館された貴館は、この20年にわたり、博学連携の実践を重ね、記録をまとめ、貴重な情報を全国に発信されてきました。一人のファンとして、貴館の今後の取り組みを楽しみにしております。そして、貴館のますますのご発展を祈念しております。



大木 真徳  
青山学院大学

美濃加茂市民ミュージアムの、「地域」をテーマとしたユニークな取り組みを拝見するたびに、いつもワクワクしています。展示や事業を通して披露される、地域を見るさまざまな着眼点にはっとさせられることが、これまでに幾度もありました。

これからも、美濃加茂市民ミュージアムならではの活動を拝見できることを楽しみにしています。



大矢 正充  
アートボランティア

私は当時中央公民館事務局に勤務して居られた高校の先輩から、文化の森開設後に、アートボランティアのお誘いをいただきました。加入後は、毎月一度の例会と市内に設置されている野外彫刻の清掃をしてきました。そして各種の催しがある度に、極力足を運び、その都度多くの方とお会い出来ましたことが、私のその後の人生に大きな糧となりましたことに感謝いたしております。

また、加茂高校時代の同級生の作家である船坂芳助君の作品を、仲間とともに市に寄贈しました。

これからも多くの市民の皆さんに「文化の森」に出かけて欲しいと願うものです。

そのことが文化の森ミュージアムの発展に繋がるものと思っています。



久保 禎子  
一宮市  
尾西歴史民俗資料館  
学芸員

住宅街を抜けると、一番高いところに見える展望台。木々の緑を背景にした広いエントランスは、開かれた自由なミュージアムを象徴するようでした。現代美術から考古学までをカバーし、市民による研究会が収集した資料や情報を活かし、新しい博物館の在り方を模索し続けているのを、少し悔しい思いで眺めていました。と言いつつも、私にとって身近な落ち着いた憩いの場、カフェの料理も抜群で、心落ち着くミュージアムとして一押しです。



**北村美香**  
結creation



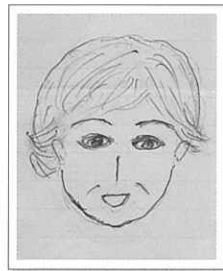
みのかも文化の森、20周年おめでとうございます！

長い間多くの皆様に愛され続けているのは、スタッフの皆さんの熱い想いと、温かいお人柄が素敵な空間を作り出しているからではないかと思っています。私にとっても文化の森は、新しい発見と一緒にリラックスもできる…なくてはならない存在です。同じ思いの方も多いのでは？

これからもさらに市民の皆様により愛される場所となりますよう、お祈り申し上げます。もちろん、通わせてもらいますね！

**西澤真樹子**  
なにわホネホネ団团长

20周年おめでとうございます。  
市民ミュージアムの展示を学び楽しんだあと、緑に囲まれて内容を反芻しながら寛ぐ時間が好きです。「ひとを文化で育てるところ」を体現している空間、それが私のみのかも文化の森のイメージ。文化の森に行くと、「ここでは感じたり考えたりすることが守られているな…」と感じることができます。地域子どもたちが、この場所で一度は「ゆっくり思考するとはどういうことか」を体感できるというのは、とても贅沢ですばらしい。これからも穏やかなあの場所が、市民の財産として続きますように祈っています。



**渋谷たゑ子**  
伝承料理の会

私は「美濃加茂伝承料理の会」のボランティアとして会の立ち上げ時から今まで何とか続けて来ました。

私の「伝承料理」は母との思い出と共にあります。5人の子育て、家業、家事、忙しい中で、お節料理の数々、初午だんご、雛祭り、春祭りのごちそう、ぶたこ、朴葉寿司、お盆のお供え、松茸、干し柿、芋切干、漬物、餅つき、餅花、全部手作りでした。どれもおいしくて今思えばぜひたくで幸せな子供時代でした。

この懐かしい経験を「文化の森」というすばらしい場所で皆さんと共に活動できる事が楽しくてうれしい。

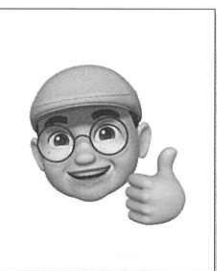
「食は文化」。若い方達にこの伝承活動をずっと繋いでいってほしいです。



**鈴木重喜**  
文化財保護審議会委員  
正眼短期大学

みのかも文化の森の開館20周年おめでとうございます。

市では、市民ミュージアムの開館以前から、歴史・民俗・考古などの調査で資料収集や記録作成を行い、その保存および展示、研究、講座に取り組みられ、多くの成果をあげてこられました。私もこれまで近世史料の調査・研究を中心に、その活動に関わらせていただきました。これらは、市民の方、延いては地域の人々のために、未来へ伝え活用すべき文化遺産です。市民ミュージアムでの調査・研究で得られた成果などを、今後ともますます地域の総合学習に活用され、地域の文化を伝える中心的な役割を担っていただくことを期待いたします。



**黒澤 浩**  
南山大学

美濃加茂市民ミュージアムのおかげ

2011年3月、美濃加茂市民ミュージアムで開催された広瀬浩二郎さんと小山修三さんの講演会の連絡をいただいた。当時、私は南山大学人類学博物館のリニューアルを担当していたが、そこで出会ったユニバーサル・ミュージアムの考え方が、人類学博物館の運命を決めた。あの頃はユニバーサルのユの字にも関心が薄かったが、あらゆる点で市民ミュージアムは先駆的な存在だったのである。とても足を向けては寝られない。これからも、様々な博物館のムーブメントを創ってください。



**香田美穂子**  
アートボランティア

20周年を祝って

文化の森20周年お目出と御座います。  
美濃加茂に現代アートが根付き、広く認識されて来た事を、とても誇りに思います。

私は、初年度よりアートボランティアとして参加させて頂き、沢山の発見と感動を体験させて頂きました。現代アートは幅が広く、これもアート？と毎回面白い。作家さんとの交流も楽しみの1つです。陶芸、アートな1日、クリスマスなどの体験講座は人気で、サポーターとしてやりがいがあります。

所蔵品展企画展も、身近で作品に触れることが出来、嬉しく思っています。

近くにヤマザキマザックの博物館が出来ました。博物館(私設ですが)と交流する事が出来たら、新たなアートゾーンに成る事でしょう。

更に、広く地域の子供達に、アートに触れて豊かな心を養ってもらえる事を願っています。



**須山知香**  
岐阜大学教育学部

美濃加茂市民ミュージアムさんへ

せっかく、人として生まれたのだから、面白いモノはぜんぶ集めて囲まれて、わたしは暮らしたいのです。が、しかし、わたしの住まう平屋1戸建てには、そのすべてが収まりません。そして、どうやら、わたしの脳味噌の記憶媒体には容量の限りがあって、そんなデキゴトですら、思考のあちらこちらへ沈することも、ままあります。

心安らぐ森の中にある、すてきな博物館。

わたしのより良き人生のため、これからもよろしくお願いします。



**高垣浩規**  
生活体験ボランティア  
学習支援ボランティア

響け子ども達の歓声

小学生が「昔の暮らし体験」で文化の森にやってきます。石うすで黄な粉を作り、七輪で炭をおこし焼きもちの試食などを行っています。自ら苦労して作った物のおいしさに素晴らしい笑顔を見せてくれます。そんなことのできるミュージアムはとても素敵です。博物館で育つ子ども達が増えることを願っております。



**酒向玲子**  
伝承料理の会

伝承料理の活動をする喜び

私は、美濃加茂市食生活改善推進協議会に入会した後に、会の有志の皆さんと一緒に、20年前に伝承料理の会に入会した事を、今は懐かしく思い出します。

伝承料理で作った料理のレシピ集が五冊になり、貴重な生きた記録集になっています。この会は、料理を通して経験した事を参加者とスタッフが共有出来るステキな会だと思います。

これからも食の大切さや楽しさを仲間と共に伝え広めていきたいと思っています。



**佐野綾目**  
生活体験ボランティア

文化の森二十周年おめでとう

「文化の森」という建物が出ることになるとは、信じられないと思いました。諸橋彩子さんとご一緒だったと思います。(二人共教育委員でした。)中部台のできる所は工事の車が行きかかっていました。私が次に伺った頃にはようやくまゆの家が出来ていて、私はそこへ伊深のお婆さん道家さんと大矢とし子さんを連れて行ったのです。道家さんにはくずまゆからまわたを作ることを教えていただきましたし、大矢とし子さんには、お茶摘みや機織を亡くなられるまで教えていただきました。洗いは二人でやりました。これは写真が文化の森に保存されていると思います。お二人共に私をかわいがって下さいました。尊敬しています。文化の森も中部台も工事が

進んでいて出来上がってゆきましたが、すぐそばに蜂屋町の一つの部落があったわけで、その部落の人たちはいわゆるたちのきされたわけです。きっと淋しい思いをされたと思います。その方たちの思いを残すため、中部台は田が残されているのでしょうか。今はどなたが作っておられるのでしょうか。やがて蚕糸試験場もなくなり、まゆの家なのにまゆをかう事もなくなりました。時代の流れはとめられないものようです。

今は全国の博物館でも資料はあってもそれを見たい、調べたい人が少なくなっていると聞きます。使っていただかなければ宝のもちぐされです。職員の皆さん、自信をもって、日本中の人々に活用をうながしていただきたいと願ってやみません。

きっと来るくる春が来る。



**高田 武**  
元 教育センター長

森の中の教育センター

教育センターは平成4年4月に創設されていましたが、文化の森の完成を機に中央公民館(現生涯学習センター)から移りました。もともと教育センターは教員の研修と教育相談が主な役割となっていました。が、新しい地に移って一変しました。

市内の小・中学生が体験を通じた学習のできる所になり、且つ、登校できない子の居場所づくりにも役立つ施設となったのです。その前段階には、文化の森をどう活用するか、活用できるか、市内の先生方による特別委員会が学年毎に、施設や所蔵の資料や機械を利用した「学習指導計画」を作成して下さった努力があったから



**高野春廣**  
春・朗読の一日

文化の拠点、交流の場、さらなる飛躍を！

「明日、良いことがあるよ。学校から文化の森へ行くんだ」と声を弾ませる小学生の孫、「デイサービスから文化の森へ連れてもらい、ついでに、隣の神社で初詣もしてきた」と96歳で亡くなる直前、嬉しそうに話していた母。妻は美術、私は朗読で、とすっかり市民に親しまれるようになってきた文化の森。

です。それと、文化の森と各学校を結ぶ専用のバスを用意して頂いたことも大きなポイントだったと思います。

今では、市内外の児童・生徒が年間約9,000人も来館してくれていると聞き、感慨ひとしおです。

平成12年10月11日教育センター主催でまゆの家で「お月見コンサート」を行ったことも忘れられない思い出です。笛師の方と琴の会の方による合奏を満月の夜に聞きました。森の中の虫たちが笛の音に合わせ高く低く鳴いて合奏してくれた音が、今も耳に残っています。この文化の森の中にセンターがあり開催できた催しです。

開館以来毎年催している「春・朗読の一日」には東海3県からたくさんさんのグループが出演し、交流する。「良い環境に、良い施設だね」と美濃加茂市民以外からも羨む声を聞く。

この20年で、文化の拠点、交流の場としての基礎は固まった。コロナ禍、財政難のもとでのこれからが大変。何とか知恵を出し合い、協力し合い、さらなる飛躍を！



高橋秀治  
岐阜県現代陶芸美術館  
館長

みのかも文化の森20周年おめでとうございます。人であれば成人という節目ではありますが、ミュージアムという施設の活動は時代に反応して常にアップデートすること、世の中の趨勢に翻弄されることなくゆるぎない基本を持ち続けることの両方が求められるように思います。地域文化歴史に密着した活動と次代を担う若い芸術家たちとも手を携えた活動を続けられているみのかも文化の森に敬意を表したいと思います。21年目からも地域に根差した文化活動を基礎に、未来に向けた人づくりを継続されることを願い応援していきます。



川尻かおる  
元 展示ガイド  
ボランティア

20年、そんなに経ったんですね。皆で勉強会に行ったこと、とてもいい思い出です。20周年おめでとうございます。

### 田口美代

展示ガイドボランティア

文化の森オープン当初から展示ボランティアでお世話になっています。沢山の発掘遺物と共に心惹かれたのは、祈りのコーナー・播隆、円空でした。円空展に向けての勉強会では、加茂地区「円空ゆかりの地めぐり」をし、素朴な木彫りの円空仏に祈りの原形を見るような思いがして感動を覚えました。高じて市外へも飛び出し、上之保鳥屋市にある日本中に一体しかないと言われる尼僧像も参拝しました。ところがその後間もなくそれが盗難にあったと聞き、驚愕の至りでした。今でも見つかっていないそうです。

どうかみのかも文化の森がこの地域の貴重な数々の文化財の保存と継承の拠点でありますことを心より願っています。

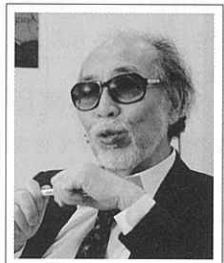


多田多恵子  
植物生態学者

初めて文化の森を訪問した日、学芸員のNさんの案内で木曾川に立ち寄った。沈む夕日に染まる川面。城跡の山々。浅瀬に沈む珪化木。何一つ人工物の映りこまない絶景に圧倒され、それを独占する贅沢さに驚いた。広い空も山も清流もロマン溢れる太古の森も、ここでは当たり前前の日常なのか。

以来、通い続けて約10年。美濃加茂自然史研究会の安藤志郎氏との交流も深まり、美濃加茂は私の特別な場所となった。関東在住の私から見ると、岐阜の植物はじつに面白い。東日本と西日本の境界域に日本海側の植物も入り込み、特有の地質が関わって生まれた深谷や湿地に貴重な固有種があって、人々の近くに息づいている。

この豊かな自然が未来に残されることを願い、みのかも文化の森がその役割を担っていくことを期待する。



田邊雅一  
デザイナー

みのかも文化の森20周年。その間、2003年の「Akira KOMOTO In Minokamo Cultural Forest」から今年の「林武史 石の記憶、泥の声」までちょうど10回、グラフィックデザイナーとして、アーティスト「小本章」「眞板雅文」「栗田宏一」「篠原猛史」「渡辺英司」「木藤純子」「川井昭夫」「押江千衣子」「大巻伸嗣」「林武史」の個展において記憶に残るポスターを制作することができた。これからもますます、デザイナーを刺激するような展覧会を企画して行ってほしい。



坪内淳仁  
宇治市源氏物語  
ミュージアム

#### 自己点検

もう十年ほど前のことだ。博学連携の一環で美濃加茂市民ミュージアムを訪れていた小学生たちの笑顔を、私は忘れられない。この光景を見て、私は確信した。博物館がする「授業」は、学校がする「授業」でなくてよい。このことを自己点検するため、以来私は毎年、同館で開催される博学連携フォーラムに参加させていただいている。自分が何者で、自分が行うことは何なのか、その確認とそれらを忘れないために。



寺島洋子  
元 国立西洋美術館

20周年おめでとうございます。初めて文化の森のプログラムを見学させてもらったときのことを今でも鮮明に覚えています。博物館の施設に留まらず周囲の自然も活用した豊かな活動でした。開館時にプログラムを体験した子どもたちも大人になり、親となって戻ってくる時代に入りました。世代を超えて多くの人々が利用する地域と共にある博物館として、また21世紀のあるべき博物館像を体現する施設として更なる発展を期待しています。



西尾和真  
文化の森の講座に  
色々参加  
社会人

創立20周年、誠におめでとうございます。心より御祝いを申し上げます。

文化の森には私が物心つく前から大変お世話になっておりました。小学校の授業だけでなく、ナイトサファリで昆虫採集をしたり、毎週フラットクラブに参加し、バードコールや勾玉を制作したことは今でもよく覚えています。当時は良くしてくださった職員の方々に憧れ、学芸員を目指そうと思った時期もありました。現在はやりたい事も見つかると、別の道に進みましたが、今の私があるのは「文化の森」での出会いや経験があったからだと感じております。大変なご時世ではございますが、新しい事にチャレンジしながらも変わらぬ文化の森であって欲しいと思っています。



西尾縁  
学習支援ボランティア

萌黄色のリーフレットに誘(いざな)われ初めて「みのかも文化の森」を訪れてから20年の歳月が過ぎました。

喜びのときも、悲しみのときも、もちろんふつうのときも、なんとなく行きたくなる場所。

いつもありがとうございます。私の人生の中に文化の森との出会いがあってほんとうに良かった。20年間ずっと大好きです。

苦境の中でも新しい歩みを進める文化の森を応援しています。

Happy 20th Anniversary!!



根本多美  
元 伝承料理の会

「へぼご飯」は材料入手が難しくなり伝承料理の講座から無くなってしまった。へぼは地蜂の幼虫のこと。講座は生へぼを巣から取り出す作業から始まる。ピンセットで巣から一匹ずつへぼを取り出す。黒い羽根が透けて見える蛹もいるし羽根が生えて飛びそうなのもいる。それは頭をピンセットでつまんで気絶させる。取り出したへぼをいり煮し、煮汁も入れて米を炊く。炊き上がり直前にはへぼも入れ蒸らし混ぜる。絶品! また食べたい。



のりづきとしお  
絵描き

文化の森20周年おめでとうございます。日頃の絵画活動は複数のテーマに沿っての制作となる。地域名や行事・物件名等も挙げられるのだが人と人のふれ合いを伴って実に楽しい。例えば可児・鳩吹山とすると歴史や地質、動植物名も得られる。

住まいを描き込めば〇〇さんちだりなどその場で緊急連絡? 足を伸ばして美濃加茂でのタバコ乾燥小屋では当方から用途や機能を伝えたり、親子の絆や思いやりを体感させて頂いたことも記憶に残る。これからの文化の森、人と人の触れ合いはコロナ禍にあっても必携、わくわくドキドキを期待します。



濱口久仁子  
元 逍遙協会

美濃加茂と早稲田を結んだ亡き菊池明先生の御供でこの地に初めて来たのは平成の初め、公民館での逍遙訳「リア王」上演の時でした。以来この地で毎年逍遙作品の上演をお手伝いしてきました。そして20年前の秋に開館に立ち会った文化の森、セレモニーでは当時の川合市長に、当日上演の「真夏の夜の夢」で使うトガーを身に付けていただいたのも良い思い出。山頂に立つきりりとした佇まいの中に温かみのあるフォルム、文化の森はいつも変わらず私を優しく迎え入れてくれます。今「木立に響く逍遙」を開催できるのも文化の森とスタッフの方々あればこそ! 感謝を込めて、心から20周年のお祝いを申し上げます



早川佳保里  
元 学習係長  
学習支援ボランティア

#### 文森20周年

学校と博物館をつなぐ「人」「もの」「こと」「場」を活かして一と題し、勤務することになった文化の森を紹介した文が手元に残っていました。

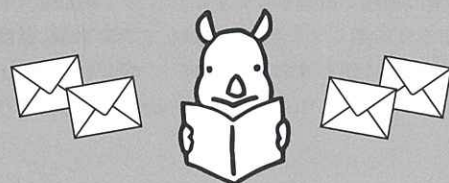
オープンして八年目、年間来館・利用者数が十万人という事実の重みを感じる毎日です。学芸員や学習係、そして各種のボランティアによって多くの市民活動や子どもたちの学習に生きるような企画が整えられ、その歩みの確かさをあちこちで感じます。いろいろな催しや展示、講座、学校活用「こと」への参加に集まる多くの「人」がいます。豊かな自然や博物館資料および設備が整えられている「もの」「場」があります。ここ博物館に集まる人たちのやわらかい笑顔、輝く目が私を穏やかにし、時には、素敵に思わせてくれる瞬間を感じることも出てきました。

この写真は「米づくりのむらから古墳の国へ」の学習に来館した6年生に、学習ボランティアさんと学芸員さんを紹介しているところです。コロナウィルスが落ち着き、文化の森に笑顔があふれる日が早く来ることを願っています。



林直樹  
文化の森利用者

カニサイを怖がった3人の子どももすっかり成長。今では大人だけで訪れる場。文化の森との付き合いは、そのまま我が家の歴史かも知れません。力のこもった企画展や講演会、これからも楽しみにしています。





船坂芳助  
作家

開館20周年記念おめでとうございます。  
オープン記念展は「親子の対話、岡本一平、太郎展」でした。一平さんは美濃加茂市で亡くなっています。当時、川崎市の岡本太郎美術館の館長を勤めていた村田慶之輔さんにお会いした。その折から親子展へと話が進展開館の運びになったと思います。村田さんは初日に来館されました。式典後、まだ健在でした初代美濃加茂市長・岸さんの奥さんの家へおじゃましました。一平さんが永年下宿されていた所です。2~3年滞在したら浜松へ帰ると言っていたようですが、ここで永眠されました。一平さんの葬儀の時は岡本太郎さん漫画集團の仲間たちが10名ほど見えたようです。一泊して次の日、目の前の木曾川からライン下りで犬山へ出て、皆さん東京方面にお帰りになったようです。色々の話が沢山出ました。村田さんも次回お会いできる事を楽しみに帰ったのですが、お二人とも今は故人です。  
今後、独自の企画展を期待します。



保木美保  
アートボランティア

みのかも文化の森20周年おめでとうございます。  
開館当初からアートボランティアとして活動をしています。  
文化の森で滞在制作する現代美術家の方々のお手伝いや市内に点在する美術作品の清掃、講座のお手伝いなどを行っています。ボランティアをしていなかったから知ることができなかった世界を体験できたり、幅広い世代の仲間ができてきました。  
作家の方々制作過程を間近で見られることが最大の楽しみです。アートボランティア新聞の制作や講座のための試作は特に力が入りました。  
文化の森は私にとって知る喜び、学ぶ楽しさを実感できる場所です。これからも楽しみながら活動をしていきます。



早川万年  
元 岐阜大学

連携の20年  
エントランスから見渡す広々としたホール。大きな窓の外の緑。この爽やかな印象は、おそらく市民ミュージアムに来館した人の誰しもが感じるものであろう。開館以来、わたしも何度か市民ミュージアムの企画に関わることができた。その時々顔触れは異なっても、そこにはいつも熱心な学芸員の姿があった。  
文化の森が二十年をかけて積み重ねてきた「連携」は、学校や市民団体に限らず、人と人が協同するところに築きあげられてきた。連携の蓄積が館の財産である。その財産は地域社会を支える基礎ともなる。地域への誠実な視線と、人の思いを大切にしながら日々の活動は、博物館を血の通ったものにする。みのかも文化の森の存在は、人々が「生きた」事実を表現し、伝承する場であるとともに、それを共感できる結節点としての役割を果たしてきた。なによりわたしはそれを喜びたい。



福原徹  
邦楽囃子笛方

文字通り森があり、それを背景とした美しい空間がある。しかも、ただ広いとか居心地が良いというだけでなく、そこに佇んでいると色々なインスピレーションが生まれてくる。  
このことは、環境や建物が素晴らしいというだけでなく、文化に対して真摯に向き合っておられるスタッフの皆さんの御尽力によることも大きいと思います。  
そして、毎回お見え下さる皆様の、暖かく、かつしっかりと受けとめて鑑賞して下さる姿勢を感じるたびに、この場所が美濃加茂市民の皆様に支えられ、皆様が「文化の森」を創り育て続けておられるのだということを、いつも感動を持って再認識させられております。20周年、おめでとうございます。



堀江良一  
作家

みのかも文化の森20周年に寄せて  
みのかも文化の森20周年おめでとうございます。  
2006年にみのかも文化の森企画による定期講座「初めての油絵」の講師となり、それが縁で、絵歩里サークルとして活動しています。

今年は当館に於けるサークル展が14回目を迎えることになっていましたが、新型コロナの影響で中止となりました。  
文化事業を支えるには困難な時代ではありますが、みのかも文化の森が市民の芸術文化振興のために、発表、享受の場として中心的役割を果たしていただけるよう期待します。



半田昌之  
日本博物館協会  
専務理事

美濃加茂市民ミュージアムが20周年を迎えます。  
お気に入りの博物館が充実した時を重ねて歴史を刻むのは、とても嬉しいことです。  
調べたら美濃加茂市が誕生したのは1954年で私と同じ歳であることを知りました。  
初めにこの地を訪れたのは、歌川広重が描いた「木曾街道六九次」をバイクで廻る途中で立ち寄った太田宿だったと記憶しています。橋のない木曾川を渡る「太田の渡し」は、交通の要衝でもあり難所でもあったとの解説を読みながら、広重の絵と目の前の景色を見比べた記憶があります。  
市民ミュージアムは、木曾川沿いの中心市街を見下ろす丘陵に2000年にオープンした「みのかも文化の森」の中心施設として産声をあげた博物館です。  
人口が約6万人の自治体の博物館としては立派な施設です。  
施設だけがドンとあるわけではなく、森の中にあり、森を活かしたさまざまな活動が博物館と一体となって、森に集う市民に、安らぎと、楽しみと、学びを提供している、ように見えます。



水谷武彦  
学習支援ボランティア

文化の森も二十周年を迎えます。  
ボランティアを二十年間続けて来られたのは、子供達の素直な心と目の輝きに元気をもらえた事と、学習係の方々が真心で接し支えてくださることが難しく、次の活動にも来ようと思えるようになりました。  
もう一つは、自分が話す内容で不正確な部分は、パソコンや辞典で調べます。これが自分の勉強にもなり、老化防止になりました。  
この三つが続けられた理由かと思えます。  
今迄で一番大変だったのは、草履作りでした。初めての体験とのことで、縄を編(な)えないし縄を継ぐこともできなく、教えるのに時間を取られて草履を完成させることが出来ず残念でした。



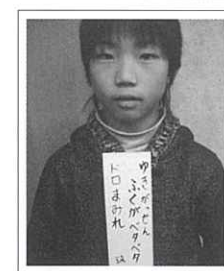
森優美子  
みのかも  
「声のドラマ」の会代表

美濃加茂市の玄関美濃太田駅から、展望台の屋根が見える程の距離にあるにもかかわらず、木々に囲まれ自然豊かな別空間に包まれた印象です。文化の森は今、子供にとっては学習や体験、大人には研修の場と同時に憩いの場所として多くの市民が集まります。開設以来、みのかも「声のドラマ」の会の拠点として活用させていただいています。もう20年なのですね。お世話になりました。この間、四季折々の景色の中で風を感じ、虫の音を聞き、時にはカモシカが登場し、夜は星の観察も楽しめる貴重な場と思っています。今後も地元の隠された遺産紹介や星を見ながらの芸術の企画を楽しみにしています。また、世界中で破壊されつつある自然の中で学習し、語らい、体験する理想のモデル空間になることを期待しています。



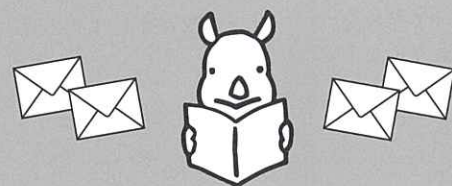
森川美沙  
文化の森の講座に  
色々参加  
元 学習係

文化の森ができたのは、私が9歳の頃でした。当時、小学校の夏休みには友達と自転車文化の森に遊びに行ったこと、母が申し込んでくれた化石公園の講座に家族で参加したことなど、懐かしく思い出します。私にとって文化の森は、誰の心にもあるであろう幼少期に慣れ親しんだ、懐かしくてあたたかくて、心のよりどころになる場所です。  
今年20周年を迎えて、これからももっと多くの子どもたちが文化の森で、いつか大人になったときに優しい気持ちで振り返ることができる思い出をたくさん作ってくれたら嬉しいなと思います。



矢野珠惟  
文化の森の講座に  
色々参加  
高校生

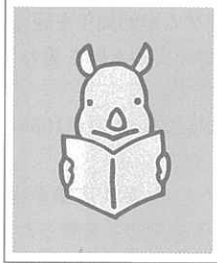
僕は幼稚園から中学校まで文化の森にお世話になりました。僕は夏休みのフォレストクラブでの思い出がとても多いです。美濃加茂市の中の歴史を学んだり、蚕の世話をしたり、織物をおったりと本当に楽しい体験ばかりでした。また、サイの模型や、いかだの体験型ゲームなど、魅力たっぷりの施設がいっぱいあります。また、塔の最上階からみえる景色は最高でした。高校生になった今、しばらく文化の森には行っていませんが、僕にとってとても思い出に残る場所です。また遊びに行きます!





山下治子  
「ミュゼ」編集長

斬新なのに、緻密であたたかい  
地域に根ざした活動を願って生まれた  
ミュージアムは数多い。しかし、美濃加茂市民  
ミュージアムの真似はなかなかできない。な  
ぜなら、教育委員会やアーティスト、市民との  
連携、ミュージアムグッズのための基金づく  
りなどハードと仕組みをしっかり作り、運営  
で盛り上げてきたからだ。他館をして「うむ  
…」とうならせる見事な地域博物館！恐縮だ  
が、私も企画に関わった「ミュージアムグッズ  
展」は、市民参加型の心あたたまるユニークか  
つ斬新な展覧会だった。身近な話題、疑問を丁  
寧にすくいあげ、ミュージアムヴァージョン  
に創り上げる緻密であたたかな気概と技術に  
喝采を博したい。



山本哲也  
新潟県立歴史博物館

ミュージアムの20周年、おめでとうございます。  
行く度に悔しい思いをして帰ってくる。そ  
れが美濃加茂市民ミュージアムだ。  
「悔しい」というのは、「こんないい仕事を  
しやがって、俺はいったい何やってるん  
だ？」と、自分の不甲斐なさを思い知らされ  
るからなのだ。  
棚橋源太郎展ではちょっとだけ協力させ  
ていただき、いい気分にもさせていただけ  
た。  
だからここは、最早私にとって掛け替え  
ない博物館だ。  
さて次もやっぱり悔しい思いをするの  
か？…しかしそれもまた良しとするか…。



渡邊いち子  
元 伝承料理の会

文化の森20周年を迎えられる事、心よりお慶  
び申し上げます。  
平成12年10月オープンに向け、文化の森から  
食改協に最初に呼びかけがありました。昭和30  
年代のカマドが復元された、この森の「まゆの  
家」を舞台に四季の郷土料理を伝えるため「伝承  
料理の会」を始めました。親から子へ、子から孫  
へと若い世代に伝えたい料理を途絶えさせない  
ようにとの思いで会員同士学び合い、楽しみに  
行事に参加して下さった方や炊き立ての御飯  
を喜んで食べて下さった子供さん達の支え  
で、沢山のレシピが残されました。また、スタッ  
フの林悦子さんが「おばあちゃんのおかって」と  
して個性豊かな楽しいレシピ本を作って下さ  
った事、感謝に絶えません。健康は私たちの生活に  
とって掛け替えのないものです。  
20周年を記念に「文化の森」が更なる発展を  
し、食の憩いの場となることを願います。



渡邊育也  
文化財保護審議会委員

何度でも訪れたい  
「一流の博物館は、リピーターが多い」。  
よい博物館とは、何度でも訪れたいとな  
る所なのです。  
市内の小学生は、1年間で少なくとも  
1回は文化の森を訪れます。子どもたち  
は、その機会をととても楽しみにしていま  
す。バスに乗りちょっとした遠足気分を  
味わえるからかも知れません。でも、一番  
の理由は、体験活動を通して学びを深め  
ることができ、その成功体験が心に残る  
からだと思います。その楽しさが、小学校  
6年間積み重なり、文化の森を「大好き」  
になります。  
『文化の森を何度でも訪れたいミュ  
ジウムに育てていく』。これが、私の願い  
ですし、私たちのめざす姿だと思っています。



渡邊博人  
元各務原市  
埋蔵文化財調査  
センター長

かつて加茂川という小さな川の  
西の台地に博物館ができるという話を  
聞いたとき、森のなかにポツンと  
起立する博物館の姿がなんとも  
心細く、街から離れたこの場所  
にはたして人が来るのだろうかかと心配  
しました。一方でほぼ手つかずの  
自然のエリアを博物館のステージと  
する思考はとても斬新で、未来への  
可能性を感じさせる試みだなあと  
うれしくもありました。そして今、  
野ウサギやテン、キジ、コゲラが顔を  
見せていた場所は多くの人と車が  
行き交う街となり、文化の森のこれ  
からがどうなるのか、あらためて  
想像を膨らませています。



渡邊昇  
元 文化課長

祝「文化の森20周年」、実に感慨深い響きです。  
市教育委員会を退職しては15年、その間にも進化・  
発展し続ける文化の森の姿に、構想段階から携わって  
きた身としては、わが子の成長ぶりに感嘆するばかり  
です。  
「急がば回れ」、文化の森ほどこの言葉がふさわしい  
施設はありません。計画途上で、普通では考えられ  
ない時間と多くの人の知能を使い、ありとあらゆる  
角度から検討を加え、すべての市民の人々が利用  
できるように考えられたことを思い出します。  
博物館や美術館の展示会や企画展に加え、朗読会や  
コンサートなど多彩な催しが企画され、多くの人々が  
参加している様子は本当に嬉しい限りです。  
また、何よりも子供たちの声が絶えず、高齢者の  
方々の利用が多い、このような施設がいつまでも皆さん  
に愛されることを願っています。

# 20周年記念対談

ここに至るまでを振り返る

みのかも文化の森の20年を迎えるに  
あたり開館当時の市長・川合良樹氏と  
教育長・渡辺俊幸氏にお話を伺った。

(聞き手:美濃加茂市民ミュージアム館長可児光生  
対談日:2020年7月23日)。

## 本物を揃える、 本格的なものを一つ美濃加茂市に

### 文化の森の構想ができるまで

可児:第3代市長の高橋三郎氏は「文化のまちをつくろう」を掲げていました。

当時文化会館や図書館がありましたが、文化の森の発足の前の様子に  
ついて聞かせてください。

川合:高橋三郎、渡辺博万の両市長が思っていたのは、「市民の方が市役所へ  
持ってきた古い民具をきちんと整理し展示する資料館が欲しい」と。

可児:「明治100年」の昭和43年頃から集め始め、昭和50年頃まで続いた  
と聞いています。その当時の民具は今でも文化の森にあります。

川合:もうひとつ、美術展なども文化会館などで開催したが、皆さんの力作の  
展示場所には少し相応しくない。渡辺浩氏や座馬井郎氏、山田貞實氏  
など市出身の作家からの作品も寄付いただき貴重な作品が増え、それを  
保管し観るための場所も必要となった。市にゆかりの文化人も多い。  
一方で「有料にしても採算の合わないものは作ってはいけない。」  
そういう考えもあった。岐阜や名古屋にあればいい、よそが作るから  
うちも作る、そういうものではない。

可児:なぜ必要と考えられたのでしょうか。

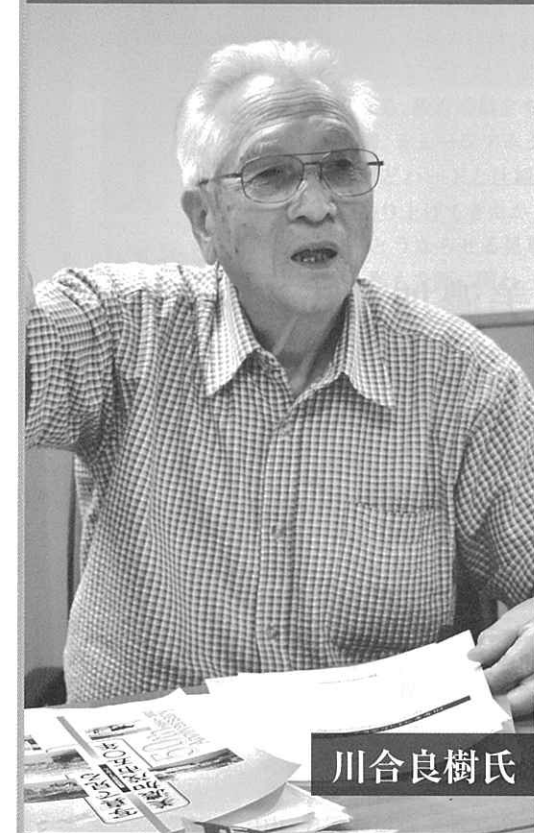
川合:それは「必要だから」だ。

例えば、学校の勉強に使う標本や実験室など、各学校ごとにつくるの  
ではいいものがない。本物を揃えて本格的なものを一つ作り、  
そこで本物を使って勉強する、それは義務教育がすべきことであり、  
それを整えるのが市の役割と考えた。そのために文化の森が必要で  
あると考えるようになったのが、平成6年頃だろうか。ただしもちろん、  
入場料はとらない。  
(次ページへつづきます)



たくさんのあたたかなメッセージ ありがとうございました。





川合良樹氏

可児:坪内逍遙や津田左右吉などの人物についても市としての取組みをと考え始めたと思います。小栗憲八氏を中心に顕彰会や公園が作られ活動が活発になり資料や遺品を集めはじめたそうですね。

渡辺:逍遙の遺品をいただきに小栗氏宅を訪問したが、押し入れの中、カビなど生えないようきちんと管理されていた。そういうところも必要だと思った。

川合:神保朗郎先生も、市史の編さんに力を入れてくださり、今の文化の森の礎となっている。

可児:早稲田大学との連携も、これまでの坪内、津田両博士の顕彰に取り組まれた先達のおかげと考えています。

### 博物館と教育センターの複合施設に向け

川合:昭和60年頃、不登校の子どもたちが少しずつ出てきて、その相談やちょっと立ち寄る居場所が必要と思うようになった。

渡辺:古田文兵氏が教育長の時に教育センターの設置の話がでた。ちょうど平成4年頃から教員の資質向上のための研修の必要性が言われるように。そして荒れる学校、不登校の子どもや適応指導のための教室も必要になり、教育相談の事業に取り組み始めた。

可児:平成12年は総合的な学習の時間の始まった頃。新しい教科で博物館を活用するためどう取り組むのか、学校には戸惑いもあったのではと感じています。この時期が博物館と学校の連携の発足に関係すると思うのですが、学校はどうでしたか。

渡辺:最初は「学校は学校で」と考えていた。なぜ「複合」としたのか、川合元市長に尋ねたことがある。「各学校ではなく一つの場所に本物をきちんとそろえること。そして『複合施設』であることが大切と考える。いろいろな人が集えるから。」とおっしゃられ、「なるほど」と思った覚えがある。

川合:「博学連携」にして良かったと思う。

渡辺:発足に向け専門部会を設け検討した。「森の学校」という視点が提案され「ここも自分たちの学校だ」と思うように。そして連携担当の人が配置されたことが大きかった。教育委員会でも博物館での勉強に必要な設備や要望のアンケートを行いバスの配置もお願いした。さらに学年や季節ごとの学習活動のプランを作った。教育センターも博物館や周囲の自然を活かした活動ができたらと願っていた。

### 2000年、いよいよ誕生

可児:当時「文化の森」課で教育センターと博物館とが同じ組織となりました。義務教育との連携のあらわれであり、少し形は変わりつつも今も基本的に同じ考えであると思います。

渡辺:川合元市長が当時頼むと言われたことが3つ。市内を見渡せる「森のタワーを作ること」、小中学生が一日ゆっくり勉強できるように「給食のための設備を備えること」、多くの人に来れるよう「広い駐車場を設けること」であった。

## 博物館で活動する大人に 感動する子どもが生まれた

川合:博物館を作るまでに佐光庸行氏や糸魚川淳二先生にもお世話になりいろいろ相談をした。

可児:展示企画のこと、滞在型のアトリエを作ることも佐光氏との相談の中で出ました。滞在型でできる博物館は全国でも珍しく、とても誇らしく思います。文化の森は色々な特徴があります。学校との連携もそう。過去だけでなく、これからの作家や斬新なものを取り入れることも大事と感じています。

川合:文化の森が始まり非常に感激したのは、皆が喜んでボランティアに来てくれたこと。とてもうれしかった。「ボランティアやらせていただいています。」と声をかけられた。200人位いらしたね。そんなにたくさんの人が無償で、と非常に驚いたことを覚えている。

渡辺:私もボランティアは本当にありがたく、うれしいことだと思った。子どもたちの作文の中に、ボランティアの人を尊敬すると書く子が出てきた。「人間を尊敬する」、そういうことをここで教えることは夢にも思わなかった。大人から学ぶ子どもの姿が生まれた。

### これからに向けて

川合:気がかりは、民具の展示室や収蔵庫をはじめとして、博物館の中で大切な収蔵庫をもう少し広くできないだろうかということ。ITの時代ではあるが、本物をきちんといねいに収蔵していくことが大切。詰め込んでしまうのではなく、取り出しやすくしまやすく、余裕のある収蔵庫を、今の倍以上に増やしていく必要がある。費用はそれほどかかるものではない。費用をかけたとしてもそれに見合う良い活動ができる。そして、昭和から平成、令和にかけての時代の遺された記録や資料についてもきちんと遺し伝えていくこと、博物館の基本を大切にしたいと思う。

渡辺:博物館というこの場所で、子どもたちが一生懸命本物から勉強していけるようにすること、そしてボランティアの人たちの活躍の場でありつづけてもらいたい。最初のころのように、教育センターと博物館のスタッフが協力して子どもたちの学習に関わっていく、そういう体制を大切にしていって欲しいと思う。

(おわり)

渡辺俊幸氏





# これまでのあゆみ

文化の森の構想から開館、そして2020年にいたるまでの道のりを年表でたどります。

## 1983~1999 構想~開館まで

### START

1983年 3月

美濃加茂市郷土資料館建設基金条例の制定。

1988年 8月

(仮称)美濃加茂市郷土資料館建設調査委員会(17名)を設置。

1990年 3月

(仮)文化の森整備基本構想を策定。(セントラルコンサルタント(株))

1990年 4月

社会教育課に博物館建設係を設置。

1990年 5月

(仮)文化の森構想の地元説明会開催。

1992年 3月

(仮)文化の森基本計画策定。

1992年 4月

中央公民館内に美濃加茂市教育センターを開設。

1992年 9月

地権者との間で「土地賃貸借契約」「物件移転補償契約」を締結。

1992年 10月

(仮)文化の森予定地の埋蔵文化財試掘調査。(～11月(北部を除き、ほぼ全域で遺物包含層を確認))

1992年 10月

(仮)文化の森予定地の樹木調査。(樹種と分布状況を調査)

1994年 3月

(仮)文化の森(全体)実施設計。

1994年 4月

埋蔵文化財(尾崎遺跡)発掘調査開始。

1994年 11月

博物館・教育センターの複合施設設計書の立案。

1996年 3月

博物館・教育センター複合施設((仮)「文化の森プラザ」)設計の予算化。

1996年 4月

博物館部門別展示検討委員会開催、以後7回開催。(自然史、考古、歴史民俗、美術工芸)

1996年 6月

文化の森構想教育センター部会開催。(以後8回開催)

1996年 7月

(仮)文化の森整備検討委員会(13名)開催。(以後3回開催)。(市として「施設の位置づけ」「森の学校」などを提示し、それを受け具体的検討をすすめる。)

1996年 11月

(仮)文化の森市民懇話会の開催。(以後、市長と語る会を含め4回開催)

1996年 12月

(仮)文化の森プラザ地質調査。

1998年 3月

(仮)文化の森プラザ実施設計。

1998年 5月

(仮)文化の森ボランティアが発足、会員11名で、主に歴史民俗の資料調査に活動をはじめ。

1998年 6月

(仮)文化の森プラザ起工式。

1998年 7月

文化の森構想教育センター部会開催。(以後8回開催)

1998年 9月

(仮)文化の森プラザ展示工事契約。

1998年 10月

「ミュージアム自由自在」講座開催。(3回、～11月)

1983

1986

1988

1989

1990

1991

1992

1993

1994

1995

1996

1997

1998

1999

to the next page

1986年 8月

美濃加茂市史料調査協力員(10名)を設置。

1989年 3月

第3次総合計画において「文化の森」「郷土資料館」の建設が位置づけられる。

1989年 3月

美濃加茂市美術品等収集基金条例の制定。

1989年 8月

(仮)美濃加茂市郷土資料館基本構想の提言(調査委員会を合計8回開催理念、目的、性格のほか立地場所、名称などについて提言を受ける。以後専門委員会において具体的検討を進める。)

1989年 8月

(仮)文化の森予定地域の植生調査。(1次)

1991年 3月

郷土博物館展示基本計画を策定(専門委員会を合計15回開催。ほか随時専門委員の指導を得る。(株)日展)

1991年 7月

空中写真測量実施。

1993年 3月

(仮)文化の森(全体)基本設計。

1993年 12月

(仮)文化の森予定地域の植生調査。(2次)

1995年 4月

「文化課」が新設され、文化の森準備が充実する。

1995年 6月

(仮)文化の森自然環境影響評価調査(平成6年7月～)(植生、動物、景観、文化財、水質他)

1995年 8月

第8回彫刻シンポジウムを文化の森内で開催。現地制作を行い、1基を仮設置する。以後、3基設置する。

1995年 3月

(仮)文化の森プラザ建築基本設計。

1995年 3月

(仮)文化の森プラザ展示基本設計。(株)日展

1995年 7月

(仮)文化の森ニュース第1号発行。(10号まで、平成11年11月)



第1号

1995年 10月

「市民のための博物館」講座開催。(4回、～11月)

1999年 1月

(仮)文化の森プラザ実施設計。

1999年 1月

ホームページ上に、「今週の文化の森」として、工事の進捗状況、準備状況を報告、公開。

1999年 1月

市職員による「文化の森運営検討ワーキング」開催。(2回)

1999年 1月

美濃加茂市自然史研究会が発足。自然調査活動をすすめる。

1999年 3月

(仮)文化の森付帯施設工事実施設計。

1999年 3月

リーフレット「文化の森もうすぐうまれます」発行。

1999年 3月

『みのかも文化の森活用の手引き』第1集発行。

1999年 3月

(仮)文化の森付帯施設工事着工。



1999.12



1999.12



1999.3

1999.3

年表でたどる

これまでのあゆみ

2000～2005 文化の森オープン!

2000年 3月  
設置管理条例制定  
(名称を「みのかも文化の森」  
「美濃加茂市民ミュージアム」  
「美濃加茂市教育センター」とする。)

2000年 3月  
工事完了。(本体建築、  
電気、管空調、  
展示、付帯施設)

2000年 3月  
『みのかも文化の森  
活用の手引き』第2集発行



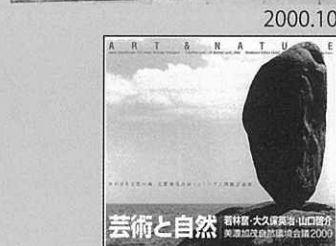
2000年 5月  
文化の森ボランティアを募集。

2000年 9月  
コンピュータ機器の設置。

2000年 10月  
竣工式およびオープニ  
ングイベント。  
美濃加茂市民ミュージアム開館記  
念展!

「芸術と自然 - 若林奮・大久保  
英治・山口啓介美濃加茂自然環境  
会議2000」を開催。  
野外劇「真夏の夜の夢」  
(シェイクスピア作、坪内逍遙訳)  
を上演。  
市民参加の演劇を以降毎年開催。

2000年 11月  
第1回「まゆの家まつり」を、  
文化の森のボランティアが  
実行委員会を結成して開催。  
以降毎年開催。



2000.10

2000.10

2000.10

2000.9

2000.10

2000

2001

2002

2003

2004

2005

to the next page

2001年 2月  
美濃加茂市民ミュージアム開館記念展Ⅳ「親子の対話 岡本一平・岡本太郎展」を開催。

2001年 4月  
第1回「春・朗読の一日」が市民による実行委員会により開催される。  
以降毎年開催。

2001年 5月  
第1回森のコンサート「ホルン五重奏」を開催。以降毎年数回、森のコンサートを開催。

2001年 9月  
「文字の登場、そして広まりー古代  
中世の人と文字をめぐってー展」を開催。

2001年 10月  
開館1周年記念で劇団近代座による  
「リヤ王」を上演。

2001年 12月  
第1回アートボランティアビデオ上映会「議事堂を梱包する」が開催される。  
以降ゴールデンアート劇場として毎年開催。



2001.10

2001年 12月  
生活体験館東に体験工房(染色)が完成する。

2002年 1月  
「暮ラシカル道具展」02を開催。  
以降毎年開催。

2002年 2月  
「川崎小虎展～暖かみあふれる  
自然の詩情～」を開催。

2002年 3月  
『美濃加茂市民ミュージアム紀要』  
第1集を発行。以降、毎年発行。

2002年 4月  
従来まで文化の森所管であった  
美濃加茂市教育センターが  
学校教育課所管となる。

2002年 6月  
「気持ちの宝物 椎名誠写真展」  
を開催。

2002年 6月  
「蚕とまゆ展」02が開催される。  
以降毎年開催。

2002年 7月  
「発掘された尾崎遺跡  
ーこの地に人が残した  
ものー展」を開催。

2002年 9月  
「ミノ」「カモ」の古代ー  
御野国戸籍から1300年ー展」  
を開催。

2002年 9月  
「太田三郎展」を開催。

2002年 10月  
常設展示室の入場者が  
10万人を超える。

2002年 11月  
伝承料理の会により  
『おばあちゃんちのおかって』  
(第1集)を発刊。

2003年 2月  
「色と形と冒険ー坂井範一とゆかりの作家展」を開催。

2003年 4月  
「土に残る記憶ー旧石器と縄文ー展」を開催。

2003年 7月  
「美濃加茂にサイヤ  
ゾウがいた頃展」を開催。

2003年 12月  
大人気の『おかって』  
第2集の発行。



2003.12

2004年 2月  
「津田左右吉-その人と時代-展」を開催。

2004年 6月  
博物館法に基づく  
「登録博物館」に認定される。

2004年 7月  
「まちの観察日記展」を開催。

2004年 10月  
「博学連携フォーラム」  
(市制50周年記念事業)を開催。  
以降「博学連携フォーラム」  
として毎年開催。

2004年 11月  
「写真で見る美濃加茂市50年」  
(市制50周年記念事業)が刊行される。



2004.10



2004.11

2005年 2月  
「情熱の人・坪内逍遙展」  
(市制50周年記念事業)開催。

2005年 7月  
「のこってほしいもの・のこしたいもの  
今森光彦 里山物語展」を開催。

2005年 9月  
「素材への思い-力と可能性-展」  
を開催。

2005年 10月  
開館5周年記念事業をおこなう。

2005年 10月  
サークル等による  
「フリーマーケット」の開催。  
以降、毎年開催。

2005年 12月  
「栗田宏一 足もとの土展」を開催。



2005.10 記念フォーラム

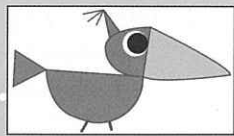


2005.12

これまでのあゆみ

2006~2011

2006年 2月 「廻国・円空ー加茂をとおりてー展」を開催。



2006年 7月 「生きる・くらす 鳥と人展」を開催。

2006年 7月 子どもわくわくプログラム「文化の森たんけんたい」「ふらっとみゅーじあむ」「フォレストくらぶ」などを開催。以降、毎年開催。



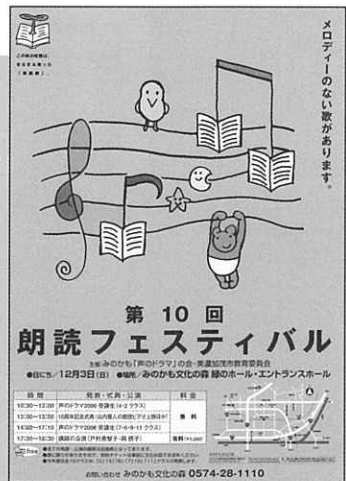
2006年 9月 「篠原猛史 Biotope Shelter ピオトープの場展」を開催。

2006年 10月 展示ガイドボランティア企画展示ちいさな展示会「円空」を開催。以降、毎年展示ボランティア企画の展示を開催。

2006年 12月 「いつもそばにカメラがあった展」を開催。



2006.9 学習支援ボランティアによる講座



1997年(平成9年)から始まった朗読フェスティバルが2006年に10回目を迎えました。

2006年 3月 市内の小学校6年生へのアンケートを始める。

2006

2007

2008

2009

2010

2011

to the next page

2007年 2月 「花をみる 鳥を描く 大矢峻嶺展」を開催。



2007年 4月 美濃加茂市と早稲田大学文化推進部が文化交流協定を締結。

2007年 7月 「美・粒子展 酒向絵美+渡邊太郎」を開催。

2007年 9月 「Critical Point 50=0 小島久弥展」を開催。

2007年 12月 「逍遙とシェイクスピアー世界はすべて劇場であるー展」を開催。



2000年から募集しているボランティアのちらしデザイン。(2007年版)

2008年 2月 「岐阜縣二人展 松本竣介・麻生三郎」を開催。

2008年 4月 「土に残る記憶VIー中世びとの世界ー展」を開催。

2008年 6月 「穂苅三寿雄・貞雄写真展」を開催。

2008年 7月 「暮らしを彩る明治の「刷り物」展ー半原版画館コレクションからー」を開催。

2008年 8月 「子どもわくわく文化の森展」を開催。



2008年 9月 「図鑑庭園 The Garden of the Name 渡辺英司展」を開催。

2008年 12月 「蜂屋柿 その歴史と人々展」を開催。

2009年 2月 「逍遙と『早稲田文学』展」(美濃加茂市・早稲田大学文化交流事業)を開催。

2009年 2月 「星野道夫展「星のような物語」ー学校向け写真展ー」を開催。

2009年 4月 「坪内逍遙生誕150年記念『山椿花となつかしも』展」を開催。

2009年 7月 「なつやすみ歴史探検ー考古学にふれるー展」を開催。

2009年 9月 「Calling 木藤純子展」を開催。

2009年 12月 「ていねいな暮らしのあったころー佐野一彦の撮った伊深の里山ー展」を開催。



2009.2



2009.12

2011年 2月 「My Space and My Dimension・1960-2010 船坂芳助 版画展」を開催。

2011年 4月 「ある日の情景、緑と子どもたち 名古屋画廊コレクションから」を開催。

2011年 7月 「おどろきはつけん みのかもの自然展」を開催。

2011年 9月 「景観の彫刻ー庭ー笹谷見生展」を開催。

2011年 12月 「美濃加茂市・早稲田大学文化交流事業 共催『没後50年 津田左右吉』展」を開催。

2011年 12月 「中山尚子展 2002ー2011」を開催。あわせて中山尚子デザインのクリスマス菓子をショップで販売。以後継続。

2010年 1月 「すきなものをすきなように 坂井範一展」を開催。

2010年 4月 組織改革によって教育委員会教育部文化振興課が市長部局市民協働部の所管となる。博物館業務、文化財保護業務等は教育委員会の補助執行業務としておこなう。

2010年 4月 「水辺の時間 内山りゅう写真展」を開催。

2010年 7月 「川のほとりでー木曾川流域の考古と歴史からー展」を開催。

2010.10 10周年記念の事業として開催した「第1回木立に響く逍遙」

2010年 9月 「みえないように 川井昭夫展」を開催。

2010年 10月 開館10周年事業をおこなう。

2010年 12月 「美濃加茂市・早稲田大学文化交流事業 共催展『美濃の白隠』展」を開催。



2010.12



文化の森キャラクターデザインの高島純氏によるオリジナルカレンダー。2000年から制作。これは2010年のデザイン。

これまでのあゆみ

2012~2017

2012年 2月 「自然線人工線 眞板雅文展」を開催。

2012年 4月 「高橋余一『生活絵巻』展—暮らしのありかを思い出す—」を開催。

2012年 7月 「あそぶ展—夢中になってあそぶ子どもの姿—」を開催。

2012年 9月 「みつえ 押江千衣子展」を開催。

2012年 12月 「みのかも定住自立圏 加茂の古代風景展—美濃加茂・坂祝・富加一展」を開催。

2012年 12月 「大嶽一展」を開催。



2012.4

2013年 2月 美濃加茂市・早稲田大学文化交流事業「岡本一平展—世態人情を描く—」を開催。

2013年 4月 「堀江良一展 版画・油彩」を開催。

2013年 6月 「渡辺泰幸展」を開催。太田宿界隈で行われる「きそがわ日和」のイベント「森の音・川の音」と連携。

2013年 7月 「鉱物と化石 なぞと美しさ展」を開催。連携企画として「bee cafe」が3種のジオ菓子販売。以後展覧会にあわせたメニューを考案。

2013年 8月 『おばあちゃんちのおかって 番外編 漬物特集』を発刊。



2013.2



2013.7

2013年 9月 「眠りにつくまで平川祐樹展」を開催。

2013年 10月 第10回目の博学連携フォーラムを開催。テーマ「博物館と子ども、ふたつをつなぐ『人』」。

2013年 12月 「けふ 野辺をあるきて佐野一彦の『伊深日記』展」を開催。

2012

2013

2014

2014年 1月 地域創造大賞(総務大臣賞)を受賞。美濃加茂市新成人を対象に「二十歳へのアンケート」として、文化の森の思い出や現況について調査を実施。以後継続。

2014年 2月 「みのかも定住自立圏 加茂の遺跡探訪展」を開催。美濃加茂市と加茂郡が締結している定住自立圏事業の一環として位置づける。関連事業としてミュージアムフォーラム「文化遺産と市民その関わり合いを考える」を開催。

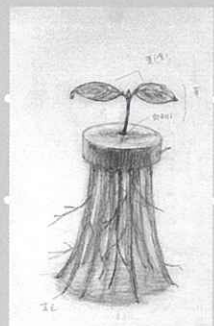


2014.2

2014年 4月 「里山のオカイコサマ 美濃加茂の養蚕展」を開催。

2014年 6月 「特集 安藤真司展」を開催。

2014年 7月 「逍遙 思いを伝えた手紙と人展」および「ひかるものフシギ展」を開催。



「文化の森賞」トロフィーイメージ図

2014年 7月 「ふらっとみゅーじあむ」支援のための中学生ボランティアを募集。以後継続。

2014年 9月 「世界のつくりかた 大巻伸嗣展」を開催。

2014年 9月 美濃加茂市児童生徒科学作品展・社会科作品展に出展された作品を対象とした「文化の森賞」を創設。以後継続。

2014年 11月 みのかも文化の森学習支援ボランティアが「岐阜県地域子ども支援賞」を受賞。

2014年 12月 「みのかも定住自立圏 加茂の遺跡展」および「美濃加茂市制60周年記念展『1954年の物語』」を開催。

2015年 2月 「「地方」文化のつくりびと 詩人・長尾和男と若葉文藝」を開催。

2015年 4月 「ラインの風景展 めぐる人々とその歴史」を開催。

2015年 7月 「里山 暮らしとともにある自然展」を開催。



2015.7

2015年 9月 「皮膚感覚 阿部大介展」を開催。

2015年 10月 みのかも文化の森15周年を迎え、美濃加茂市民ミュージアムの新たなロゴマークを作成、新しいミュージアムグッズを制作し販売開始。



15周年を記念したマグカップ。(高島純氏のイラスト)

2015年 10月 15周年を記念し、ミュージアムフォーラム「地域博物館がこれからめざすところ」、エントランスにおいての展示「ミュージアムニュースにみる文化の森15年」、まゆの家の特別行事を開催。みのかも広報10月1日号に文化の森特集記事掲載。

2015年 12月 「旧石器 遺跡と発見展」を開催。

2015

2016

to the next page



2016.7



2016.7



2016.7

2016年 2月 「のりづきとしお展」を開催。

2016年 4月 「おどろきとこだわりのミュージアムグッズ展」を開催。各地のミュージアムや個人から多くの出品。また、ショップにて全国各地のグッズを販売し好評。



2016.4

2016年 7月 「起点 飛騨街道展」「わくわくを伝えたい 博物館の裏側と『展示』ができるまで展」「ダボ市・美濃加茂市姉妹都市 文化交流企画展 The River展」を開催。

2016年 9月 「第41回岐阜県移動美術館 ひとをかくひと」開催。



2016.9

2016年 12月 「モノを蒐(あつ)めるまなざし 早稲田大学會津八一記念博物館蔵のコレクションとともに展」を開催。

これまでのあゆみ

2017~2020

**2018年 2月**  
美濃加茂市・早稲田大学文化交流事業10周年記念共催展「絵を通して見る坪内逍遙」開催。



2018.7

**2018年 4月**  
「使い込むほどに暮らしの今むかし展」を開催。

**2018年 7月**  
「ダムー木曾川・飛騨川一展」を開催。

**2018年 9月**  
「中村裕太 | 日本ラインの石、岐阜チョウの道」を開催。

**2018年 12月**  
「版画史と『私』船坂芳助・堀江良一・安藤真司を中心に」を開催。

2017

2018

2019

2020

**2017年 2月**  
「静かなる森の要請 篠原芳子展」を開催。



2017.3

**2017年 3月**  
公式ホームページ更新、芝生のはりかえ。Wi-Fi運用開始。

**2017年 4月**  
みのかも定住自立圏第2次共生ビジョン関連事業「織田信長の東美濃攻略 加茂に生きた武将たち展」「文化の森コレクション展」を開催。



2017.4

**2017年 7月**  
夏の展覧会「このあたりの自然」を開催。

**2017年 9月**  
「河村み When I am laid in earth -私が大地に横たわるとき-」を開催。



2017.4



2017.12

**2017年 12月**  
「まちのいいものよいところー山之上一展」を開催。

**2019年 4月**  
「瑞林寺 500年のほらかな旅路展」を開催。

**2019年 7月**  
「日本の博物館は岐阜からー博物館の父・棚橋源太郎と岐阜ゆかりの人々ー展」を開催。



2019.7

**2019年 9月**  
「竹田尚史 質量の泉と重力の霧」開催。

**2019年 12月**  
「岐阜大学コレクション展ー岐阜県を知るためにー」を開催。

**2019年 12月**  
「特集展示 後藤秀樹 床の間を離れて。」開催。

**2020年 2月**  
ていねいな暮らし講座「今の時代に、忘れかけているもの」開催。

**2020年 3月**  
「岐阜大学コレクション展ー岐阜県を知るためにー」岐阜大学会場を開催

**2020年 3月**  
コロナウイルス感染症拡大防止のため臨時休館(3月3日-6月1日まで)

**2020年 4月**  
「楽しくなる古文書ー明智光秀史料を中心にー」は同年12月に延期。

**2020年 7月**  
「戦争と暮らしー子どもたちの手紙から」展開催

**2020年 8月**  
コロナウイルス感染症拡大防止のため臨時休館(8月1日-8月17日まで)

**2020年 10月1日**  
みのかも文化の森(市民ミュージアム、教育センター)開館20周年

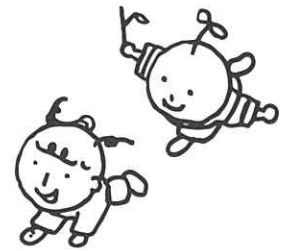
20周年記念の催しを計画。また常設展示室の一部「もようがえ」



2020.10

子どもたちと文化の森-その先を目指して

みのかも文化の森(以下、文化の森)には大人も子どもも来館します。平日には学校の生活科や理科、社会科などの教科の学習活動で、休日には文化の森で開催している講座や企画展などの催しに参加。子どもの頃から博物館と関わりを多く持ち、大人になっても博物館に親しめる、生涯にわたり博物館を身近に感じ、活用してもらえるようにという願いを持っています。



1. 学校の授業を「みのかも文化の森」で行うー学校活用

文化の森という博物館の資料や展示、人や場などを教材として、各学校の教育課程や年間指導計画に位置付いた学習活動を学校と行っています。

① 学校活用の支援体制

・学習係の配置

学習係のスタッフは教員免許所有者や教員経験者、学芸員などがスタッフとして配置されています。学校との活動日程調整や活動準備など児童生徒の文化の森活用に関わる業務を担当しています。また毎年度末に一年間の活動をまとめた『みのかも文化の森 活用の手引き・活用実践集』を作成し、実践プログラムや活動の様子、先生方による振り返り、子どもたちのアンケート結果などを掲載します。

・チームティーチングと事前の打ち合わせ

活用の前に学習係と担任の教員が必ず打ち合わせを行います。文化の森側のひとりよがりな活動とならないよう、学校側がお客様にならないよう、各学校や児童生徒の実態に合わせた活動内容とするために、学校での事前・事後の学習とつながりのある活動とするために大切にしています。打合せをもとに、教員・学芸員・学習係・学習支援ボランティアがチームティーチングで授業に参画します。子どもたちの学習に教員以外の大人が関わります。

・文化の森と学校を結ぶバスの手配

文化の森と市内小中学校とを結ぶ送迎のバスを市の予算で手配しています。



② 文化の森の「人・もの・こと・場」

文化の森にある「人・もの・こと・場」を活用し、「本物」との出会いを活かした「ここでしかできない活動」を通して得られる気付きや感動を大切に、深い学びを目指しています。

・文化の森の「人」

歴史・考古・美術・民俗・自然の学芸員も授業内容に関連する資料を学習係と一緒に準備したり、講師として児童生徒に話をしたりします。また学習支援ボランティアは、活用中の安全の見守りや声かけ、自身の経験を生かして講師としても関わります。

・文化の森の「もの」

常設展示室の展示物資料や収蔵資料についても、可能な限り学習活動で活用していきます。博物館で学ぶからこそこの「本物」に触れる機会です。

・文化の森の「こと」

常設展示室や企画展示室の「もの」には、その「もの」に与えられた情報(解釈)と一緒に提示されています。博物館の価値観ともいえるそれらの「こと」を、どのように感じ、受け止めるかということも文化の森での活用における大切な要素の一つです。

・文化の森の「場」

文化の森には、博物館施設としての展示室はもちろんのこと、自然観察の森や遺跡、昔の養蚕民家を復元した生活体験館(まゆの家)など、文化の森ならではの学習ができる「場」がたくさんあります。その「場」の空気(雰囲気)の中で体験するからこそ感じる、気付くことができることは、子どもたちの記憶にも深く刻まれています。(次ページへ続く)



# 子どもたちと文化の森-その先を目指して

## 2. 休日の時間—子どもたちが楽しむ博物館活動

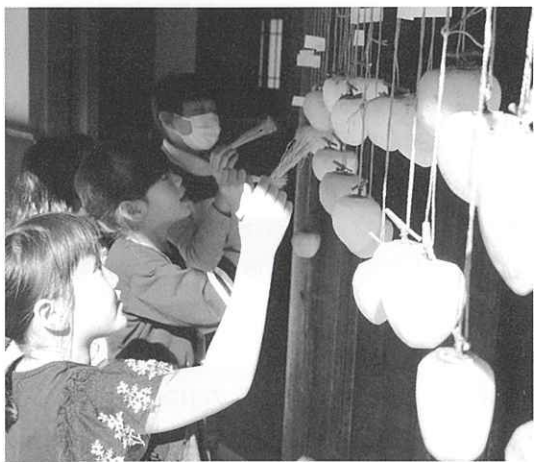
休日の子どもたちが自然観察や歴史学習、創作活動などの体験活動や、より博物館の活動を深く知ることができる講座も開催しています。

そのうち3つをご紹介します。

### ①フォレストくらぶ

博物館に親しみを持つ子どもたち、より深く博物館と関わりを持つ子どもたち(はくぶつかんこ)を育むことをねらいとした会員制の定期講座です。

企画展に関連のあるものや、学芸員やボランティアの専門性を活かすものなど、「博物館だからできること、博物館でしかできないこと」を体験する内容を目指しています。同時に自分たちの生まれ育った地域への関心や誇りを持つことや、地域に残る昔ながらの伝統文化や季節の行事についてもふれる機会となることを意識しています。



### ②ふらっとみゅーじあむと中学生ボランティア

夏休み期間中、「文化の森に『ふらっと』訪れた子どもたちや親子が気軽に参加できる」ことをめざし、幼児から中学1年生までを対象に実施しています。就学前の小さな子どもたちでも楽しめる内容である一方、工夫できるポイントを用意し、小学校高学年から中学1年生の子どもたちもやりがいを感じられるような内容となることを目指しています。

また2014年度からは講座の開催に合わせて、講座に参加した子どもたちの活動を支援する中学生ボランティアの活動も始めました。初年度には24名であった参加者は2019年度には61名の参加となり年を重ねるごとに増えています。



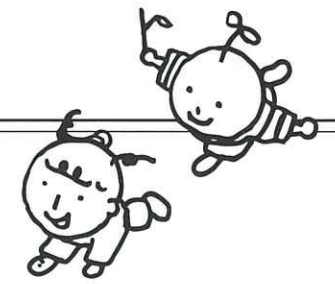
### ③「自然探検発見わくわくクラブ」

2018年度から始めた幼稚園や保育園の年長以上の子どもから大人まで、親子でも大人だけでも楽しめる講座です。美濃加茂市内のフィールドを中心に植物や昆虫、野鳥などの観察やスケッチ、工作など色々な活動を取り入れています。毎回新聞を発行し、見つけたり観察したりした生き物などの確認や道具の使い方の振り返り、スケッチ画なども掲載します。子どもだけでなく、大人も楽しみ、それぞれが楽しむ姿を見せあい、さらなる面白さを見つけていく、そんな循環が生まれています。



## 3. 文化の森で学んだ子どもたちの声—アンケートの結果から

学校の授業で来た時や休日に遊びに来た時に、子どもたちがつぶやいたり、スタッフやボランティアと話したりしたことを大切にしていきたい、ここでの活動の「その後」の姿を知りたいと考え、子どもたち自身の言葉を集められるアンケートを始めました。将来にわたって博物館を訪れたり、博物館を楽しんだりしていただくことを願っています。



### ①小学6年生アンケートから

(2005年度に試行版、2006年度から現行の内容で実施)

6年間で文化の森での学習経験が子ども自身の学習やものの見方、行動などにどのような影響を及ぼしたのかを、子ども自身の言葉から調べるため、毎年市立全小学校の第6学年全児童を対象にアンケートを行っています。

設問内容は6年間の文化の森における学習の中で、①印象に残っている学習について②学習後の行動③学習したことについて④文化の森での学習の提案⑤文化の森に一言の5問で構成、選択式設問と自由記述で回答していただいています。

毎年度の6年生は600人前後、そのうち91%程度の子どもから回答を得ています。各学校のご協力で高い回収率となっています。

アンケート結果を見ると、6年間の活動の中で印象に残る学習は、最新の2019年度調査では3年時社会科「古い道具と昔の暮らし」が

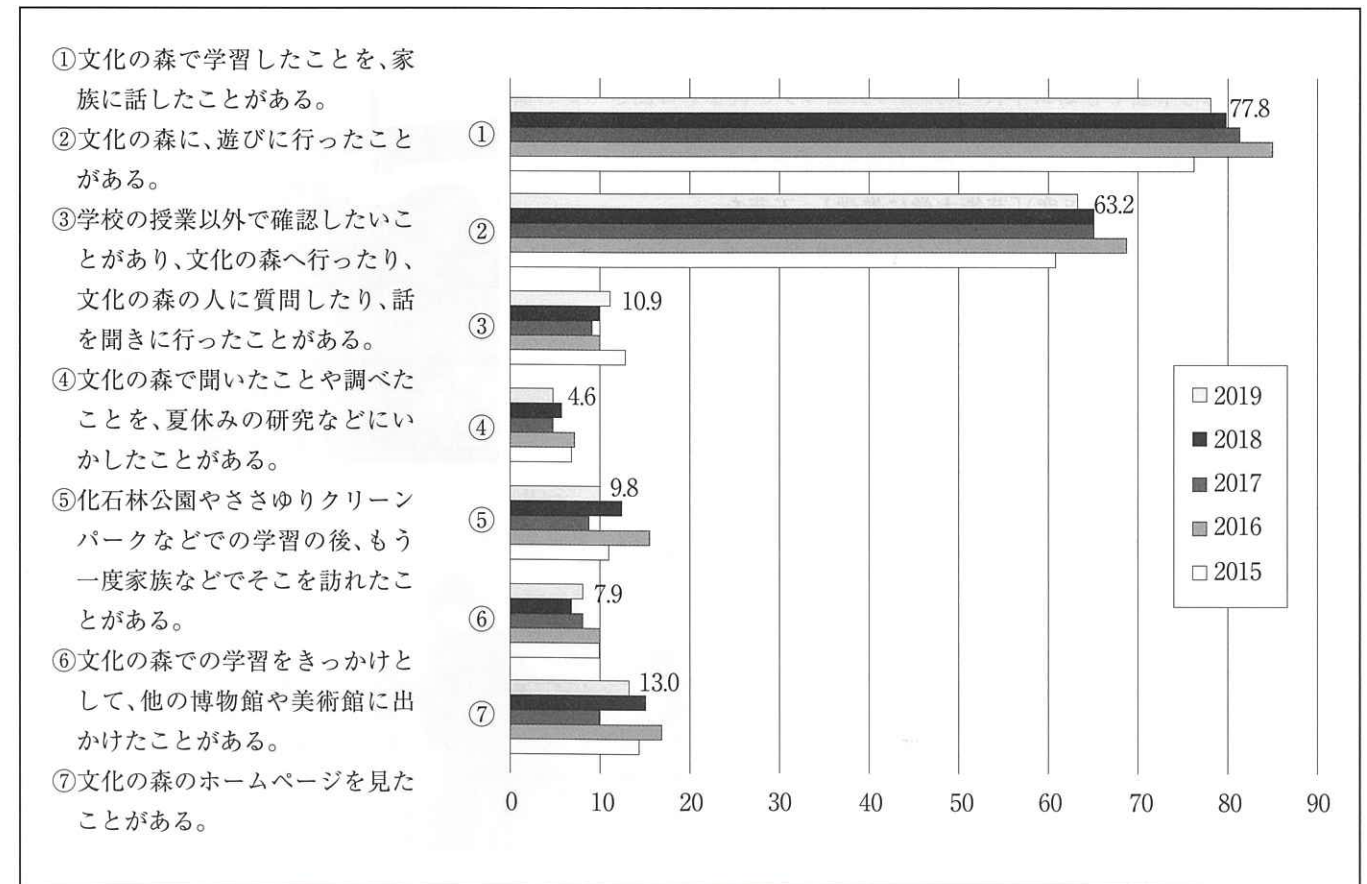
20%、5年時総合「五平餅づくり」26%、6年時社会科「縄文のむらから古墳のくにへ」が19%、6年時総合・社会科「今に伝わる室町文化」が26%と上位に上がります。また、低学年時の学習としては例年国語科「たぬきの糸車」生活科「昔のあそび」を9~10%の子どもが挙げています。

これらの学習はボランティアなど人との関わりが強く、本物にふれる体験であるという共通点があり、まさしく「人・もの・こと・場」があるから成り立つ学習です。これらの学習の思い出を記述する子どもも多くみられます。

来館後の子どもたちの行動については、毎年7~8割の子どもが、「文化の森で学習したことを、家族に話した」と回答し、「学習後、家族で化石林公園へ行き、弟と化石を探した。親も興味を持ち、楽しんでいた」(2012年度)と、その後家族と一緒に化石林など学習した場所へ再び出かける行動や他の博物館へ行く行動に繋がったという子どもはそれぞれ毎年1割程います【グラフ1】。

(次ページへ続く)

【グラフ1】 2015~2019年度項目別回答率(%)



# 子どもたちと文化の森-その先を目指して

(前ページから続き)

文化の森の学習により自分について問う設問では、実際に川や地層の様子、化石を観察する学習で教科書ではわからなかった気づきがあり、「これまでは苦手感じていた教科の勉強が楽しくなった」と回答する子どもが毎年います。

文化の森でしてみたい学習については、「文化の森のまわりの環境で、地球温暖化のことを知れる学習」(2010年度)など環境問題と森の自然が結びつく内容が多くあります。

「文化の森へ一言」という自由記述では、先にふれたボランティアへのお礼など、人との関わりに繋がるものや、「ここに生まれてよかった」(2010年度)と、自分たちの住んでいる地域との関わりに繋がった回答があります。

## ②成人式アンケートから

文化の森では2013年度より毎年新成人を対象としたアンケートも実施しています。これは文化の森における学びが、小学校卒業後彼らになんらかの影響を与えているのかを調査することが目的です。印象に残っている学習については、リースなどの作品づくりや、五平餅などの食べ物作り、昔の道具体験など、今でも行われている学習が多く記されており、展示室のカニサイやいかだの模型について記述する人もいます。卒業後の来館目的については、「遊び・散歩」で来館する機会が多く、「なつかしい」「自然に囲まれていて落ち着く」(2017年度)といった理由から来館するという回答が多数あります。文化の森での体験が、今の自分に影響を与えているのかという設問に対しては、「影響を与えた」(「ある」「少しある」を含む)と選択した方はおよそ18~25%、「学芸員資格を取得するために勉強している」(2017年度)「芸術大学に進学し、工芸を学んでいる」(2018年度)「生物学に興味が出た」(2019年度)などの回答がありました。一方、「影響を与えていない」と回答した人の割合は15~18%でした。

今後に向けては、「これからも活動を続けてほしい。いずれ自分の子どもにとっていい思い出ができると思うから」(2018年度)と、文化の森の活動が未来に向かって継続することを願う声や、「高校生や大学生対象の講座・催し物があると良いと思う」(2019年度)という意見も寄せられました。

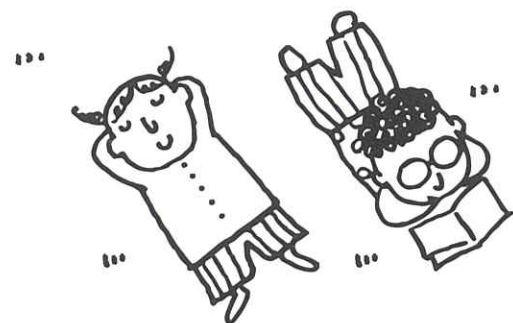
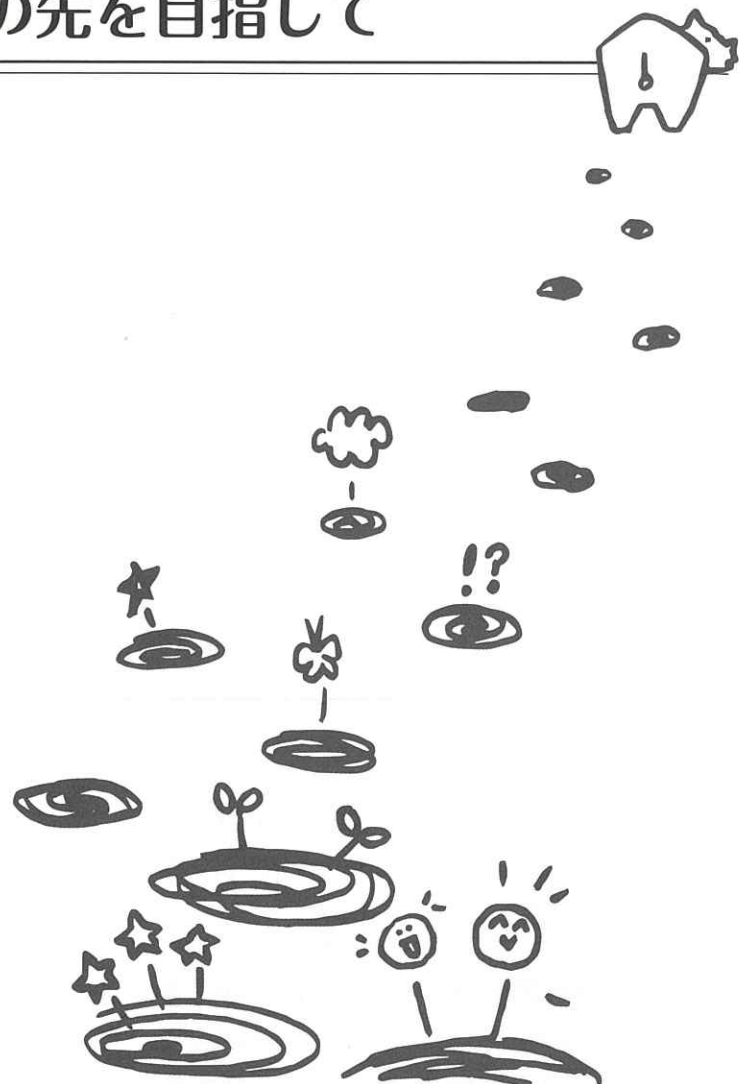


写真:岩屋孝志

## 二十歳になりました

感謝です。

まずは、20年間、さまざまな形で当館を支え応援していただいた方々に心からお礼を申し上げます。2000年に開館するまでも、10数年の計画期間がありました。そんな準備の頃から関わりを持っていた方々、中にはもう他界されている方もおられます。陰で支えていただいた数えきれない人たちの力があって今があることを、あらためて胸に刻みたいと思います。

二十歳の誕生日を迎えました。これまでの積み重ねをもとに、さらに人々のワクワクする好奇心へ、この地を見つめる視点へ繋がる場となるよう、模索を続けていきます。これからもいろいろな問題にぶつかることがあるでしょう。しかし決して形式ばることなく、常に柔軟に、なにより自由な空間としてあり続けていきたいと考えます。

新たなスタートです。

### 常設展示室の「模様替え」にあたり

20年目にあたり、常設展示室をすこしだけ模様替えしました。「常設展示室」って、なんか難しそうな名前ですが、ここはこの地域の良さや奥深さをみなさんと共有する場です。気持ちを楽にして室内を自由に巡ってください。

ならべてあるもののほとんどが本物・実物です。存在感のあるリアルな展示品から「何か」をそれぞれで感じていただきたいです。バーチャルなものからは得ることのできないものはずです。展示品のそばには関連する説明文などが添えてありますが、それらは何かを覚えてもらうために置いてあるわけではありません。みなさんの興味関心を深めてもらうためのちょっとしたお手伝いしか過ぎません。

まずは、展示をじっくりと見ていただき、何か一つでも「なぜかな」「この次の展開は？」とか「これを作った人はどんな人だろう」などと、好奇心をふくらませ、展示品の向こうの世界に思いを巡らせてもらえたらありがたいです。さらに、展示をご覧になったあとに「今度こうしてみよう」「現地を訪れてみたい」などと、みなさんの日々の暮らしの発想やこの地に住む楽しさに繋げていただければ最高です。

この展示室が、そして文化の森がこれからもみなさんの心に響き、記憶に残る場となることを心から願っています。



美濃加茂市民ミュージアム  
館長 可児光生

1.文化の森入館者数

	常設展	企画展	学校活用	講座・イベント等	市民活動	貸館	教育センター等	視察	その他	合計	
2000年度(平成12年度)	41,453	—	8,174	10,166	—	—	1,622	—	8,850	70,265	*1
2001年度(平成13年度)	47,457	—	8,080	38,513	—	—	7,598	—	11,372	113,020	*2
2002年度(平成14年度)	46,293	—	8,442	42,952	—	—	9,769	—	13,798	121,254	*2
2003年度(平成15年度)	41,696	—	7,705	47,424	—	—	5,371	—	10,994	113,190	*2
2004年度(平成16年度)	38,377	—	6,248	48,543	—	—	4,061	—	9,897	107,126	*2
2005年度(平成17年度)	26,104	8,759	7,552	14,065	—	29,268	3,622	149	9,088	98,607	*3
2006年度(平成18年度)	23,425	9,837	8,311	11,753	—	30,280	3,492	217	8,658	95,973	*3
2007年度(平成19年度)	21,707	10,663	8,538	11,327	3,229	29,470	2,816	157	8,790	96,697	*3
2008年度(平成20年度)	24,153	9,880	8,543	10,491	3,053	28,591	3,437	134	8,828	97,110	
2009年度(平成21年度)	21,321	7,613	7,416	11,921	2,517	24,681	2,412	278	7,817	85,976	
2010年度(平成22年度)	21,136	10,163	8,713	5,946	2,436	29,209	2,233	116	7,997	87,949	
2011年度(平成23年度)	20,880	7,564	9,309	5,322	2,316	32,473	2,544	123	8,053	88,584	
2012年度(平成24年度)	20,926	8,269	9,724	4,835	2,653	31,579	2,769	63	8,083	88,901	
2013年度(平成25年度)	21,770	12,408	9,614	5,498	2,574	29,231	3,338	130	8,456	93,019	
2014年度(平成26年度)	22,184	11,820	10,033	5,687	2,269	26,114	3,147	307	8,157	89,718	
2015年度(平成27年度)	21,817	11,844	10,631	5,209	2,405	25,651	2,799	270	8,064	88,690	
2016年度(平成28年度)	21,573	11,733	10,483	4,770	2,395	26,276	2,885	350	8,046	88,511	
2017年度(平成29年度)	20,928	11,756	10,003	5,277	2,480	30,268	3,855	142	8,471	93,180	
2018年度(平成30年度)	18,621	12,374	9,401	4,538	2,723	28,237	2,852	74	7,881	86,701	
2019年度(平成31年度/令和元年度)	17,526	8,274	7,883	4,810	2,496	23,579	2,166	136	6,687	73,557	
										1,878,028	

\*1 2000年度10月から3月まで。教育センターは4月から3月まで。

\*2 2001年度から2004年度までは、「常設展」には「企画展」、「講座・イベント等」には「貸館」、「その他」には「視察」を含みます。

\*3 2005年度から2007年度までは、「その他」には、ボランティア活動参加者、喫茶室利用者を含みます。

2.市民ミュージアム収蔵資料の公開と活用

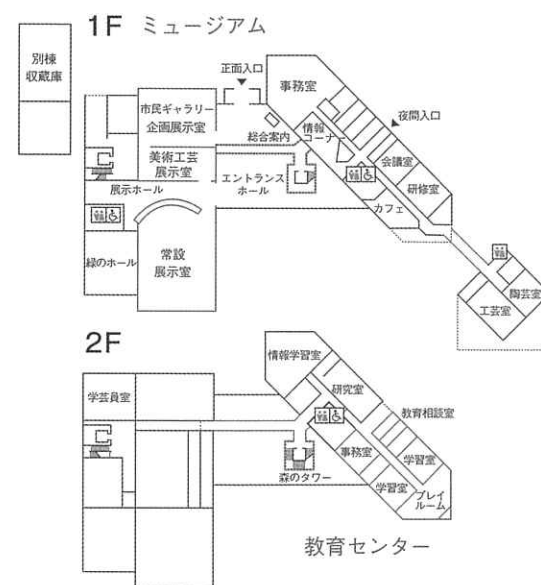
文化の森ホームページでのデータベース公開状況(各年度末)

	歴史	民俗	図書	美術	歴史写真	広報写真	植物	動物	考古	累計	増加分
2000年度(平成12年度)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2001年度(平成13年度)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2002年度(平成14年度)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2003年度(平成15年度)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2004年度(平成16年度)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2005年度(平成17年度)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2006年度(平成18年度)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2007年度(平成19年度)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2008年度(平成20年度)	14,374	4,268	18,170	561	1,515	512	4,557	4,573	3,018	51,548	—
2009年度(平成21年度)	16,058	4,296	19,000	644	1,543	512	4,557	4,573	3,018	54,201	2,653
2010年度(平成22年度)	16,610	4,353	19,968	733	1,543	512	4,557	4,701	3,130	56,107	1,906
2011年度(平成23年度)	18,065	4,386	20,860	786	1,543	512	4,557	4,714	3,130	58,553	2,446
2012年度(平成24年度)	18,487	5,058	21,640	884	1,543	512	4,557	4,714	3,320	60,715	2,162
2013年度(平成25年度)	18,737	5,115	22,380	913	1,543	512	4,557	4,714	3,566	62,037	1,322
2014年度(平成26年度)	19,243	5,187	23,000	980	1,543	516	4,557	4,714	3,566	63,306	1,269
2015年度(平成27年度)	19,317	5,299	23,610	1,108	1,543	516	4,557	4,714	3,566	64,230	924
2016年度(平成28年度)	19,349	5,356	24,740	1,108	1,543	516	4,557	4,714	3,566	65,449	1,219
2017年度(平成29年度)	19,540	5,358	26,080	1,430	1,543	516	4,557	4,714	3,566	67,304	1,855
2018年度(平成30年度)	19,648	5,493	26,520	1,470	1,543	516	4,557	4,729	3,596	68,072	768
2019年度(平成31年度/令和元年度)	19,832	5,536	27,990	1,609	1,543	516	4,687	4,736	3,677	70,126	2,054

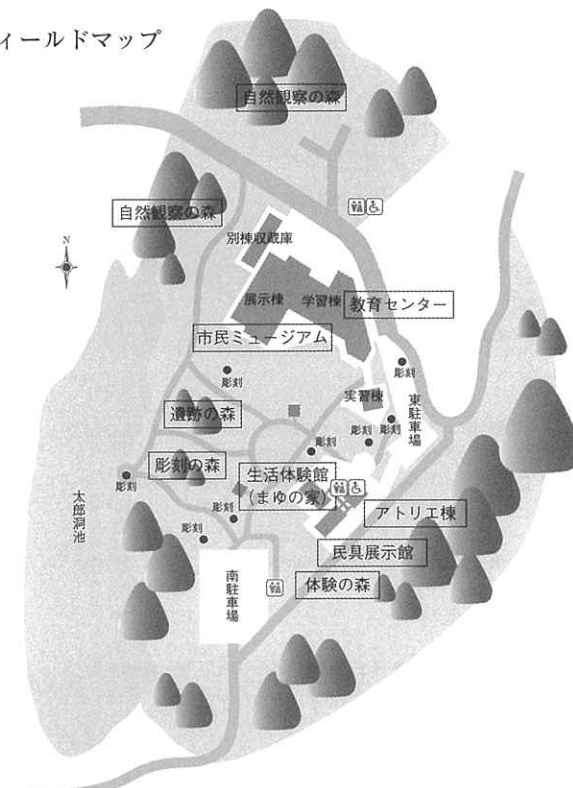
施設概要

名称 みのかも文化の森  
 所在地 美濃加茂市蜂屋町上蜂屋3299番地1  
 森の面積 約9ヘクタール  
 建築概要 本体施設 「ミュージアム」と「教育センター」との複合施設  
 R C造、一部鉄骨・木造、地上3階、地下1階建  
 延床面積 5,879㎡  
 常設展示室(452㎡)、美術工芸展示室(150㎡)、企画展示室(市民ギャラリー)(260㎡)  
 付帯施設 生活体験館(211㎡)、民具展示館(201㎡)、アトリエ棟(158㎡)  
 屋外トイレ…2カ所 休憩小屋…2カ所  
 駐車場 174台(南駐車場 110台、東駐車場 54台、北駐車場10台)

■本館平面図



■フィールドマップ



■利用案内

開館時間 午前9時～午後5時  
 休館日 市民ミュージアム 月曜日(ただし、祝日の場合は開館し直後の平日が休館日となります)  
 年末年始(12月29日から翌年1月3日)  
 教育センター 土曜日・日曜日・祝日  
 年末年始(12月29日から翌年1月3日)

■交通

鉄道 JR名古屋駅から美濃太田駅まで特急で約40分  
 高山線 美濃太田駅北口から徒歩約17分  
 自動車 東海環状自動車道 美濃加茂ICから約5分  
 名神高速 小牧ICから約35分  
 コミュニティバス(あい愛バス) JR美濃太田駅北口から約8分「文化の森」下車

みのかも文化の森 20周年記念誌

編集・発行 美濃加茂市民ミュージアム  
 505-0004 岐阜県美濃加茂市蜂屋町上蜂屋3299-1  
 電話:0574-28-1110 FAX:0574-28-1104  
 http://www.forest.minokamo.gifu.jp

デザイン:柳澤美香  
 印刷:三仲印刷  
 発行日:2020年10月1日





みのかも文化の森

美濃加茂市民ミュージアム  
美濃加茂市教育センター